



昭和16年入学の1年桜組(担任小久保先生)

前列右から6人目が頼本富夫氏

戦時下の小学生4 ～朝鮮 興南龍城公立国民学校～

1910(明治43)年から1945(昭和20)年まで日本領であった朝鮮には日本人学校が設けられ、現地に進出した日本人の子供に対する教育が行われていました。今号では、朝鮮で生まれ、小学生時代を現地で過ごされた頼本富夫氏の著書『忘れ得ぬあの日 あの時～敗戦一北朝鮮・興南からの脱出～』から抜粋して、朝鮮での国民学校生活などを紹介します。

文中の【 】内は筆者による注記です。

父、頼本雅雄

私の父、頼本雅雄(1897(明治30)年～1962(昭和37)年)は、愛媛県伊予市の出身。大工の棟梁をしていた叔父小笠原秋吉の影響を強く受け、建築を学ぼうと志し上京。昼は株式会社松本組(現松本建設株式会社)で働き、夜は東京工科大学(現東京工業大学)建築科で学ぶことになった。学生として学ぶ身である父が最初に携わった仕事は、霞ヶ浦海軍航空隊にドイツから移送された「押収(欧州)格納庫」を組み立てる現場の監督であった。

1924(大正13)年3月に卒業すると、そのまま松本組に就職し、熊本第六師団偕行社(1931(昭和6)年の陸軍特別大演習の際には大本営となった。)改築工事、朝鮮総督府鉄道局図們線敷設工事、陸軍平壤兵器本廠建設工事に従事し、1934年から終戦までは、建築技師として、朝鮮窒素肥料興南工場の火薬工場をはじめ、多くの工場の建設を手掛けてきた。この朝鮮窒素火薬工場製造の固形燃料をロケット推進用に使用したのが、人間爆弾「桜花」である。一方、液体燃料は、国産初のジェット戦闘機「橘花」の燃料として使用されたが、これは、1945年8月7日の木更津海軍基地での初飛行に成功したものの敗戦となり、惜しくも使用されることはなかった。

重化学工業都市興南

【北朝鮮咸鏡南道】興南【現咸興市】は、20戸ばかりの草葺きの民家と小さな名ばかりの漁港とがあるだけの寒村にすぎなかったが、1927(昭和2)年から、日本の新興財閥である日室コンツェルン(注)が、鴨緑江の本・支流に世界有数の大発電所を建設し、その豊富な電力を背景に、硫安・油脂・火薬・電極・非鉄金属などの大化学工場群を建設した。更に、朝鮮窒素肥料など10社を超える日

本窒素肥料の子会社や関連会社が設立され、工場総面積は600万坪(1980万㎡)に及んだ。それらの設備の持つ能力は、水電解では世界第1位、硫安生産では50万tで世界第3位、とアメリカのTVAと比肩する世界屈指の大化学コンビナートが形成されたことにより、興南は朝鮮第一の重化学工業都市になっていった。更に、工場・倉庫・事務所は勿論、従業員の住宅から学校・病院・役場・集会所・警察署に至るまでの、完全な街づくりが行われ、従業員は4万5千人、その家族を含めた総人口は18万人に達している。当時の小学校の地理の教科書には、「東洋一を誇る化学肥料工場」と記載されている。

興南龍城公立国民学校

私は、1941(昭和16)年4月1日、興南龍城公立国民学校に入学した。ここは、1944(昭和19)年当時、朝鮮随一の設備の整った学校と言われ、朝鮮各地の教育関係者が視察に来ると言うことであった。このことは、当時の校長や担任からもよく聞かされた。この学校と隣接の興南高等女学校とは、急増する日本窒素肥料関係者の子弟のために特に設立されたものであり、日本窒素からの特別な手厚い配慮が随所に窺える。校舎は、鉄骨煉瓦造の2階建て、全館スチーム暖房であった。私は昭和16年12月、早朝で教室がまだ暖まっていなかった足で載せて、友達と一緒に凍えそうになった足を載せて、友達と「大東亜戦争緒戦の戦果を語り合ったことがある。暖房は、便所にまで設置されていたと思う。と言うのは、1階東の便所には、校内美化係で担任の森田敏枝先生が、青色のポスターカラーで苦労して書かれた「便所は心の鏡です」の文字が、スチームのために滲んでいて、気の毒な気がしたのを覚えていて、気がある。ポスターカラーも入手困難になっ

ていたもので、家にある人は持つてきてほしい、と先生は言っておられた。学校の窓は全部二重窓で、これも防寒のためであった。2階中央の100畳ほどもあるうかという広い裁縫室も、気持ちの良い教室であった。

戦時中の食糧難時代、昭和19年秋の遠足では、弁当の検査があった。弁当箱の真ん中に梅干しを1個だけ入れ、おかずは一切入れないという、いわゆる日の丸弁当である。それ以外は一切禁止という厳しい遠足であった。母が、それではかわいそうだとアルマイトの小さなおかず入れに、その当時は貴重品であった缶詰の大和煮の鯨肉を少々入れてくれたが、出発前の弁当検査で、担任の森田先生から「頼本さん、それはいけません！と持参不許可となった。遠足終了後、弟吉伸と2人で裏山へ上り、持参を許されなかった弁当の残りを食べた。その時、遙か彼方に連浦飛行場が見えたが、飛行場に飛行機は1機も見えなかった。海軍航空隊は全機が移動していたのである。

学校の朝礼では、皇国臣民の誓詞をその都度、朗誦させられた。これは昭和12年、皇国臣民としての自覚を促すべく、朝鮮総督府が制定したものである。内地では無用であった。元はと言えば、朝鮮人に日本人としての自覚を促したものである。児童用の「其の一」、大人用の「其の二」の2種類があった。早朝、駅のホームや工場などからは「一つ、われわれ臣民は！とという大人用の「其の二」を高らかに朗誦する声が、あちこちから聞こえてきた。

皇国臣民の誓詞(其の一)

一、私共ハ大日本帝國ノ臣民デアリマス

二、私共ハ心ヲ合セテ天皇陛下ニ忠義ヲ盡シマス

三、私共ハ忍苦鍛錬シテ立派ナ強イ國民トナリマス

龍城校講堂内部
(落成記念絵はがき。右壁面下部にスチーム暖房用のラジエーターが写っている。) 昭和20年3月の最後になった。



興南龍城公立国民学校
前のレールは新興鉄道
亜鉛工場引き込み線。右奥
は興南高等女学校(頼本雅
雄氏撮影 昭和11年)

勤労奉仕

頼本富夫『授業を割いて勤労奉仕』(龍城友の会第3号所収)1971(昭和46年)9月26日記

昭和20年度、私たち興南龍城公立国民学校の5年生男子は、4月から週に1度朝から窒素肥料工場へ勤労奉仕に出掛けた。学校の玄関には、「大東亜戦争完遂」のスローガンが掲げられていた。学校の授業も、体操の時間は手旗信号の練習、音楽ではピアノの鍵盤の音に合わせてモータース信号を暗記した。運動場は開墾され、キャベツや馬鈴薯が植えられていた。鋏を取る日も多く、その上運動場の隅々には空襲に備えて待避壕(タコツボ)を造ったので、その穴掘りもしなければならなかった。学習と勤労奉仕が半々という状態で、その上に避難訓練もある。興南での昭和20年度は、落ち着いて勉強をしていなかったのである。

私たち男子は、天機里の窒素肥料工場へ(吠(藁筵を2つ折りにした袋)の縄通

しに度々出掛けた。目が痛くなるほどの強いアンモニアガスの中を潜り、薄暗い工場での仕事は何となく小学生の私には不安であった。直径4cm、長さ25cm

くらい先の尖った鉄のパイプを吠に突き刺し、そのパイプの中へ縄を通し、吠の口が閉じられるようにしておく作業である。尖ったパイプとは言え、袋状の吠へ一気に刺し通すというのは、なかなか体力の要る仕事である。あまり体の大きい方ではなかった私などは1日50枚の予定が、初日には半分くらいしかできなかった。手にできたマメに硫酸がしみ込んで、ヒリヒリ痛む。見かねた引率の塚原先生が、舟場君という体の大きなクラスでは腕白の名の高かった男子に手助けを命じ、やっとノルマが果たせたとやがて昼食になると、大豆粕入りのにぎり飯と糠蝦(アミ)の塩漬が出る。飯を家から持参するのは許可されなかったが、おかげで自由だった。私は持参した卵焼きを舟場君に進呈した。終戦も間近になった頃、この肥料工場行きは中止になったが、その時の報酬は、日の丸扇のマークが入ったチツソ石鹼1個だった。

松根油採集のための松根掘りも思い出の1つである。場所は忘れたが、これも天機里の奥の方だったと思う。重いスコップを肩に、板一枚の一本橋を渡って行った。途中あまりに喉が渴いたので、私は初めて川の水というものを飲んだ。仕事が終わってやがて帰途に就く。軍歌を歌いながら歩くのだが、へとへとに疲れて声も出ない。すると塚原先生から、「コラッ!歌えっ!」と一喝されて、スコップで頭を一撃された。(別に恨みがない)そこを言っているのではありません。(そこを)気を取り直し、やけくそで歌っていると、道端に埋め込んであるコンクリート製の防火用水の中へザブンと落ち込んだ。精錬所の煙突のある

坂を下った、ちょうど九龍里の入口の所である。

学校前の亜鉛工場にもしばしば行った。薄ら寒い雨の降る中で、電線用の硝子(硝子)を水で洗った。これは女子も一緒にやったと思う。工場の小母さんが出してくれた熱い番茶が忘れられない。私の父は、ある建設会社【株式会社松本組】に勤務しており、当時は興南火薬工場のNZ製造工場の建設に当たっていた。NZというのは、特殊高性能爆薬である。建設途中で終戦となったため、NZは実現しなかったが、戦後、父はその建設の苦労話をよくしていた。

この火薬工場へ何日間か、火薬の袋貼りに行ったことがある。予め糊を塗った広げた一枚の大きな紙の上へ木型を置き、それを包むように左右を合わせて貼り、次に底を折り込んで貼るのであるが、何回もやるうちに相当熟練して能率が上がったと思っている。当時、日室興南工場に勤務しておられた鎌田正二氏(現チツソ石油化学取締役)の文章によると、軍は早くから興南地区からの撤退を予定しており、退却の時、火薬工場を爆破する計画であったと言う。危険な火薬工場での作業など戦時下であったからこそでき得たのだろう。

やがて終戦となり、工場破壊も実施されず終わったが、朝鮮戦争で完全に破壊された。昭和26年頃に見たニュース映画で、生まれた時から親しんだ、あの精錬所の大煙突が、米軍の手で木葉微塵に爆破されたのを知った時、言いようもなく残念で、淋しい気持ちになった。日本人の努力で完成した大工場である。これは単に私だけの感慨ではあるまい。

引き揚げ、帰国

1945年8月15日、敗戦の詔勅により、北朝鮮においては、日本人による行政機関は、閉鎖され、機能しなくなり、官吏

は逮捕か追放され、軍隊も警察も武装解除で捕虜となって無防備となり、都市は全く無秩序の混乱状態となった。日本人の財産は、公私を問わず没収され、生活基盤を1日にして失った。それまでの価値観は一変し、日本人としてのプライドは傷つけられ、物心両面から打ち拉がれた惨めな状態となった。更に旧満州・北朝鮮・シベリアなどのソ連占領地区からの引き揚げは、なかなか始まらなかった(北朝鮮では、日本人の第1回正式引き揚げは、昭和21年12月18日に始まった)。そこで、日本人は、いつになるやら分からない正式の引き揚げを待ち、切れず、ソ連軍の監視の目を掻い潜り、自費で帰国を図った。これが脱出である。私たち一家は、昭和21年4月22日深夜、密航船に乗り、38度線を越え、25日に注文津へ上陸した。注文津からは石炭運搬船で浦項を経て、30日夕刻、釜山に到着。5月1日夕刻、釜山出港。翌朝8時頃、博多港に上陸。4日16時、全員無事に、父の郷里・南伊予村上野(現愛媛県伊予市上野)に到着した。

※頼本富夫氏の著書『忘れ得ぬあの日 あの時』敗戦―北朝鮮・興南からの脱出―には、朝鮮での生活、敗戦と引き揚げ、戦後間もない頃の松山での生活、と激動する時代の中での一家の記録が、詳細に綴られている。本校図書室にも同書を惠贈頂いた。

(注)日室コンツェルン

野口遵が、明治時代に日本窒素肥料を設立したことに始まる。「野口財閥」とも呼ばれる、日本窒素肥料を中心とする財閥である。15大財閥の1つ。アジア太平洋戦争の敗北により、総資産の90%近くを失い、戦後の財閥解体により解散した。日本窒素肥料はチツソと社名を変更し、その他の関連会社は、旭化成・積水化学工業・積水ハウス・信越化学工業などとなり、現在でも日本の化学工業の一翼を担っている。